

## 大正十一年の赤彦

宮川 康雄

大正十年十月歐洲留学の途に上る斎藤茂吉を横浜港埠頭に見送った赤彦は、今後『アララギ』を殆ど独力で背負うべき立場に立つたことを思つて、身を引き緊めた。赤彦がまず力を傾けたのは、茂吉が不在となることから生ずる結社『アララギ』の弱体化を防ぎ、さらに強化するにはいかにすべきかという課題についてであつたろう。写生派は歌壇の主流となつて数年を経、すでに相当強固な基盤を固め得ていたとはいふものの、茂吉の留学は、やはり、組織に不安をもたらし大きな要因であつたにちがいないからである。

赤彦が大正十一年新年号の『アララギ』に、「異体抄」と題する詩を載せたのも、あるいはこのことと関係があるのではなからうか。この詩は、大正八年九月、石原純と共に宮城県牡鹿半島さきの海上に浮ぶ島、金華山に遊んでの帰途、大時化のために風浪にもまれる船中で、当代高名なこの理論物理学者が船底にうつ伏し、苦しむ姿を目のあたりにしたとき赤彦が覚えた怪しいまでの感動の記憶を想起して作られたものであり、その後一年半にして純と原阿佐緒との恋愛が新聞紙上に報道され、世の話題を賑わわせてからの赤彦の純に対する応接の経過をみると、いまなぜ赤彦がこのような詩を『ア

ララギ』に発表したのか、奇異の感を拭えないのである。しかしこれも、『アララギ』をできる限り安定の状態におきたいという念願にでたものであると解するならば、容易に理解できるように思われる。この年五月には純の歌集『曙日』もアララギ叢書の第十四編として刊行されることになり、赤彦は五月号『アララギ』の「編輯所便」で、「石原純氏歌集『曙日』近くアルスより出版せらるべし。苦研二十余年にして初めて歌集あり。小生等の幾たびも歌集を出すと同じからず。世に出づる日歌壇の視聴を聳えしむべし。大賀に堪へず。諸氏の清読を祈る。」と記している。

長塚節全集の編纂を企画したり伊藤左千夫の歌碑の建立計画を援助したりしたのも、この年のことであつた。これらは、先人の業績を顕彰し、その遺産を省みることによつて今後の『アララギ』の歩みを堅実なものにしようとする伝統尊重の志向に出たものであるが、ここにも組織をより強固なものにしてゆこうとする赤彦の努力の跡を認めることができる。

長塚節全集についていえば、赤彦がこの全集の編纂について節の弟整四郎に宛てて希望を伝えたのは大正十一年三月下旬のことであつた。三月二十日付で次のような書簡を送っている。「拝啓益々御清昌奉賀上候陳ハ今回書肆春陽堂と話し候上「長塚節全集」公刊仕度只今迄公刊の外文章及書簡等を合せ数巻に分ち刊行の希望に有之

御承知下され候へど大慶の至奉存候今回の事は全くアララギ発行所にて責任を負ひ可申同人手を分ちて従事可仕候事は横瀬夜雨様も同じ企をせられ候よし承り候処露骨に申して同氏よりもアララギ同人にて従事候方遺文及書簡等蒐集の便多かるべく且故人に於かれてもその方首肯して下さるべく我等岡麓平福百穂兩氏等とも話し合ひし次第に有之候御承諾の御返事下され候へど幸甚奉存候敬具」

この書簡に対して四月初旬に、整四郎の兄長塚順次郎から返事があり、両者が書簡を往復した後、全集編纂の話がまとまったのである。赤彦は、五月号の『アララギ』に「長塚節全集発行につき」として節全集の編纂のため、節の書簡の所持者は臨時貸与してくれるよう求める揭示を載せている。

左千夫の歌碑の建立計画は、長野県諏訪郡富士見村の青年会の発起によるもので、赤彦のもとに相談のあったのは、大正十年のおわりか、十一年のはじめの頃のことであつたらう。赤彦が発起人の一人丸山為之助に宛てて、「過般申上候石碑の儀小生上京前の仕事山積の有様ゆゑ帰国の上参上の事に願上候段々延引失礼存候」と手紙を出したのは、十一年の二月三日のことであつた。赤彦が郷里の下諏訪町に帰つたのは同月下旬であるから、この頃から計画が具体化に向かつたのであらう。歌碑の建設資金は、主としてこの地方の『アララギ』関係者の餘金でまかなわれることになった。

富士見村のある一帯を富士見高原というが、ここは左千夫が愛して幾度か遊んだところであり、渡欧前の茂吉もこの地で病後の身体を養つたのであつた。このように『アララギ』との関係が深く、左千夫の歌碑の建立地としては、最もふさわしい土地の一つであつたといつてよい。

赤彦は茂吉が去つたあとと重責を一身に負うと共にいよいよ多忙に

なることや『アララギ』の会計についての対策が必要であることを思つて、その対処の方法についても工夫をめぐらせた。その結果、とつた方策の一つは、従来毎月定例の日に会員と面談、作歌指導の機会としてきた面会日を廃止することであり、他の一つは、制限を設けていなかった機関誌『アララギ』への、会員の出詠歌数を一か月二十首以内に制限することであつた。

この新しい方針は、大正十一年の『アララギ』新年号の「編輯所便」において、早速会員に伝えられたが、その通告をするに當つて赤彦は次のように記している。（面会日の廃止については会員に存続の希望が強く、その後継続のことになった。）

大本は何処までも自分一人の工夫にあるべきです。自分一人の工夫が主であるといふこと万人皆理解して万人多く逸し易い傾をもつてゐます。自分一人の工夫は静蘭沈著であるべきです。静蘭沈著に身を置くべき修道者が何をしてゐるか。（この質問の対象には勿論小生自身も入つて居る）面会日問題よりもこの方が遥かに重要な問題です。小生等の仲間はお互に忙しい勤めを持つてゐて、静蘭に身を置くべき時間すら甚だ乏しいやうです。その乏しい時間を何に割いてゐるかと考へて見ることは御同様の身の為になりませう。小生の考へでは小生等が自分一人の工夫を大切と思ふ時、最も信じ合ふ友人間の訪問応答さへ無駄になる部分が多くなります。屢時人と交り接するといふことは大抵無意義です。さうして大抵軽躁です。少人数多人数の会合は稀にあつて別趣に意義を齎すに過ぎません。所謂会合好きと修道とは恐らく一致しません。「アララギ」の特徴は従来多数会合の度の少かつた所に現れてゐるかも知れません。相群れて説を吐くといふやうなことは大した価値あることでありませ

ん。小生等は御同様只時間を惜しむべきです。面会日のことから大分話がそれましたが、面会日意義も上述愚見と関聯して御考へを願ひます。

会員毎月の出詠数は今後二十首限りと改めました。一首へ力をこめることに一層苦んで頂きたいといふ感が多いのです。歌稿を見るに二十首三十首の多数を寄せるものほど心の潜め方が不足の傾向をもつてゐます。真実に力をこめた歌は毎月さう多数あるべきではありませんまい。(例外は勿論ありませう) 毎月の歌稿に力作の多く現れんことを望みます。

すなわちここで注目しておきたいのは、面会日の廃止も、出詠歌数の制限も、たんに事務処理上の都合とするのではなく、生き方や作歌の態度との関連において説かれてゐることである。

外面を飾るよりも内面の充実をこそ重視しようとするのは赤彦の一貫してとつてきた態度であつたが、このような求心的な志向は、同じ頃『枯野』の三月号に寄稿した「芭蕉の全心」においても明瞭にあらわれている。赤彦はそこでは「芭蕉の生活の中心は生涯を通じての全心の一点集中であり、そして集中が何処までも大きな人情の自然に合致してゐた所にあらうと思ひます。」と述べ、また「我々は只大きな古詩人の前に多岐なる自己の生活心を恥づる心があつていいと思ひます。」と記している。これがやや月日を経て、会員を対象とした『アララギ』五月号になると、いっそう強い発言となり、次のように記すに至るのである。

只自己の道が自己の生命に根ざすことの深からんを冀ふのみ。木の根は土を掘り石を穿つ。掘ること弥々深くして枝幹はじめて高し。小生等は只根氣よく土を掘つてゐればよき也。井深くして初めて白昼の星を映ずとかいふなり。星を見んと冀ふもの

只々深く穿つべきのみ。穿つことは生涯の道なり。

(編輯所便)

このような信念は、やがて茂吉なき『アララギ』に強く作用し、それを性格づけるものとなつたのである。

赤彦はしかしながら、外部からの『アララギ』への批判に対しては籠城主義的な態度をのみ持していることは許されない立場に身を置いていた。『アララギ』に批判が加えられればそれに答えなければならなかつた。それで赤彦は自分が選者をつとめる『東京朝日新聞』紙上に「竹柏園歌話」を掲載していた佐佐木信綱が、十一月二十五日川田順の歌集『山海経』を批評し、今後の順の歌風について「抒情詩の發展と並んで、そのみに偏らず抒情詩もしくは主観的方面への發展をも見たいのである。云々」と要望し、「これまでの傾向にのみ、猶向つて行かれたならば(中略)自分が要求する君(中略)の歌風の個性は段々うすれて、終になくなつて行きはしないかと思ふ。蓋しこれは和歌に於ける所謂写生主義のおもむくべき、寧ろ一般の傾向であると思はれるからである。云々」と写生主義に關して批判を行ったのに対しては、翌月上旬、「竹柏園歌話の一節につきて」と題して、同紙上で強く反論を加えている。「今の時、尚、抒情と抒情と並立して考へるやうな頭の持主では、とても写生は判らぬ。深い写生を解するまでに至らぬ頭には、写生の歌が個性を失ふに至ると見えるのは御尤もである。写生を非難する多くの歌人は、大抵写生を物質的に外廓から見えてゐる人々である。外廓から見えて容易な写生概念を得てゐる人々は、すべての事象に対して到底その核心に潜入することの出来ない人々である。(中略)今の世上にザラにある所謂写生歌の如きは、あれは流行の物真似写生歌であつて、小生等より見れば多く外廓的写生歌である。彼等は写生歌を

非難しながら多量に浅はかな写生歌を作つてゐる。その態度、その言行の不徹底さが彼等の頭を物真似にし、外廓的にし、物質的にしてゐるのである。小生のこの言を確めるためには現今の歌の雑誌を手当り次第に一二冊拡げて見れば十分である。」そして、「斯様な中にあつても佐々木信綱氏の如き初歩写生に低徊してゐる人は、現在に於て絶無である。」と、強く批判している。

他流の批判のなかでは生活派のそれが殊にきびしく、『アララギ』の写生歌は現実生活をなおざりにするものとして排撃された。西村陽吉も批判を加えた一人であり、赤彦のもとにも一文を寄せてきた。それに対して、赤彦は『アララギ』誌上で次のように答えている。

「小生は西村氏を歌人西村氏として、歌の事で考へを交換する事は応諾するが、人生観や人類観や国家観で意見を言ひ合はうとは思はない。成る程左様なものは相依つて個人の生活を規定する。それならば一般生活問題に就いて意見を交換するかと云へば、夫れも小生は氏の挑みに對して興味が出ない。成る程個人の一般生活は（小生の言ふ生活は衣食住といふ如き有形に現れるもののみを指さない）直に個人の芸術を規定する。併し乍ら芸術は生活の帰結或は生活の最高頂点であつて、生活と別れ別れのものでなく、猶其の上に完全に芸術としての独立を持つてゐるものである。西村氏と芸術を論ずるひまを持つが、一般生活を論じ人生観国家観を論ずるひまがないと言ふ心は、生活問題や人生観国家観を蔑視する意でない事西村氏の了解する所となるであらう。猶他より言へば、芸術は直に生活であるが、生活が悉く芸術ではない。芸術に従ふ者は芸術に現れた生活を先づ凝視する事が尤も敬虔なる奉仕の道である。それがなくて常に一般生活（殊に有形的生活）を云為する以上に出でぬ如き態度にある事は、芸術の根本を知るに似て実は芸術者として疎懶者であ

る。氏は「我々は常に我々の実生活は我々の第一義である。芸術活動は我々にとつては寧ろ第二義のものである。云々」と言はれる。小生は芸術活動をも実生活と見てゐるのであつて、芸術者が芸術活動に弛緩である態度はその芸術者の他の生活も果して如何であるかを疑ふ程に思はれるのである。この辺西村氏と小生との芸術観相違をなしてゐるやうである。」（西村陽吉氏に答ふ「大正一一・三」）

この赤彦の言を聞くと、赤彦が芸術至上主義的な立場に加担するもののようにみられないでもないが、むしろ赤彦はいわゆる芸術至上主義者ではなかった。「個人の一般生活は（中略）直ちに個人の芸術を規定する」と言い、「生活問題や人生観国家観を蔑視する」ものではないと言つてゐることからも、そのことは明瞭である。しかし、「芸術は生活の帰結或は生活の最高頂点」であると言ひ、「芸術活動をも実生活と見てゐる」と述べるとき、芸術のために全精力を注ぐことが人生における最高の生き方であると固く信じていたことがうかがわれ、この点で兩者の間には決定的に疎隔を埋め得ないものがあつたのである。

## 一一

赤彦は大正九年六月に『氷魚』を上梓して以後、作歌の面においては、一年ほどの期間、殆ど進境を見せなかった。それが大正十年の半ばになると、停滞を脱し、新たな歌境をひらくかに見えた。これが大正十一年に入ると、いっそう瞭然としてくる。

『アララギ』の新年号と三月号に連載された「木曾御嶽」の連作は、前年の夏に、次男健次と三男周介を伴つておこなった木曾御嶽への登山に取材した作品であるが、赤彦晩年における山岳詠の秀作

の生まれる契機をなした作品として注目される。

二月号に発表された次のような作品には赤彦の歌に随伴して離れ難かった一首のなかに材料を盛り込み過ぎる欠点が克服されて表現の単純化がかなりの程度まで実現されているのを認めることができる。

山のべに家居しをれば時雨の雲たはやすく来て音立つるなり  
光さへ身にしむころとなりけり時雨にぬれしわが庭の土  
わが庭に散りしもろもの木の葉さへさやかに見えつあはれ月  
夜に

久方の月明らけし時雨の雲はつかに山に残りたるらし  
山下に時雨の雲は動けども月の光し押し照りにけり  
桑畑の桑の落葉にふる時雨さわがしくして止みにけらしも

これは、三月号に掲載された「こども」の諸作においても同様である。

暁がた眠りふけるこれの子の頭を目守るあはれにおもひて  
これの子をあはれとぞ思ふ夜おそく起きて晝よみしことを知り  
居り

自らをあはれめる子やあかときの雞聞きて眠りたるらし  
なるがままにただに随ふことを知れるこれの子どもをと思ふな  
り

愚かとしてただに言はめや自らの力をつくし飯減るこの子を

以上の諸作は、いずれも郷里諏訪における日常生活に取材したも

のであり、日常生活の詩化に成功した作品であるといつてよい。表現の単純化を進めたことと共に、このように日常生活に歌材を求め、それを作品として定着させることによって新しい歌境をひらいてきたことがこの年における赤彦の進境であるといつてよいであろう。

五月号に四首の作を発表したあと六月号に出詠していないのは、四月に古今書院から『赤彦童謡集』を上梓したことで万葉集叢書の仕事に力を注いだこと及び五月に三女のみをの病気で看護に尽したことなどのためであつたらう。

作歌と並んで万葉集の研究においても従来にまして力を傾けることになった。この年の活動として特に記憶されるべきは、友人橋本福松の経営する古今書院の万葉集叢書の出版計画に協力、これに關して相当の成果を収めたことである。この叢書は、各地に埋もれている万葉集の写本の類を復刻し、作歌と万葉集の研究に役立てようというのが出版の趣旨であつたが、企画の段階から相談にあずかつただけでなく、一部の書物については校訂や解説も担当し、さらに『アララギ』会員への販売についても努めるなど、事業の成功のために尽したのであつた。十一年の三月から四月にかけては上野図書館に通っているが、これは万葉集叢書に収めるべく同館所蔵の岸本由流著『万葉集攷證』の浄書本とそれを筆写した原稿とを比較するためであつた。『万葉集攷證』が武田祐吉を校訂者とし、万葉集叢書第五輯として出版されたのは、大正十四年四月である。

赤彦の万葉観に關連して特色のあるものに、万葉集系統論がある。大正十一年に入ると赤彦はこの面においても考察を進めた。すなわち、『アララギ』の四月号に「民謡の性命」と題する一文を載せて、「日本民族は太古から日常の感情を歌謡にして自ら口に唄ひ、若くは対者と相唱和するといふ風があつた。これは日本の民族心理

を考へる上に見通すべからざる特徴である。」と述べ、「夫れ等の民謡のうちで、ある特種の形式を備へたものが長歌短歌となつて、万葉集時代に大きな発達をした。然るに万葉集時代に或る緊張の頂点に達した長歌短歌が古今集以後の勅撰集に至つて自ら性命を失つて、その精神を当時の民謡に伝へた。(或は短歌長歌は勅撰集以下の墮落によつて自らその流れを失つて本来の民謡に暫くその所在を潜めたと見てもいい)」とし、「この民謡の系統は鎌倉時代より足利時代、徳川時代を経て順次発達推移して今日に及んでゐる。」が、「夫れ等の民謡のうち最も多く生命のあるものは、矢張り民衆の苦しい生活から生れ出た歌謡である。」とする。そして、「農民の唄ふ歌謡は楊氣に似たものも底に重も重もしい調子が籠り、船頭唄、馬子唄に多く漂泊の哀音が籠つてゐる等はその著例であり、花柳社会の歌謡に遊びの心が多いために、大抵駄洒瀟の遊戯品になり了つてゐる如きは、その反対の例証である。」と述べている。次いで赤彦は、船頭唄、馬子唄、百姓唄の例を具体的に挙げて説明を加え、「職業によつて挙例したのは、生活の苦しみから生れた唄が、自から職業的個性の或る頂点を現すに至つたと思ふものを挙げたのであつて、その辺まで進んでゐる唄は、民謡として何れも充分の生命を持ち得ると思ふのである。」と言ひ、また、「職業的個性の頂点を現すほどの民謡は、夫れが又地方的個性を現すと言ひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くも土の個性を離れることは出来ないであらう。」と自身の考察を記している。

職業的個性、地方的個性というようなことを述べているのは、これまでの赤彦の万葉集系統論——大正六年六月の「隆達の小唄」や八年十月の慶応義塾図書館における講演「万葉集の系統」——においてはみられないところであつた。民謡への関心も一段と深まつて

きたことを思わせるのである。「民謡の性命」を発表したのと同じ四月に、赤彦は大正九年以来創作した童謡をまとめて古今書院から『赤彦童謡集』を刊行しているが、この刊行も、民謡への関心の深まりと関連をもつものと認めてよいであらう。

赤彦はこうして民謡の研究のため、その蒐集に乗り出すことにし、『アララギ』の五月号では「民謡の蒐集について」揭示し、会員に協力を求めている。

赤彦の精力的な活動が続けられるなかで『アララギ』はこの年も不安定に陥るのを回避することができ、そしてやがて赤彦を中心として新しい体制が結社内に形成されることになった。

むろん何らの障害もその間になつたのではない。家庭内で赤彦の心を悩ませていたのは長女はつせの離婚である。はつせが結婚したのは大正九年十一月であるが、やむをえない事情から、十年のおわりか十一年のはじめ頃には実家に戻つてきていたのである。この結婚については赤彦も積極的に話をすすめてまとめたこともあり、苦惱も小さくはなかつた。二月九日付で東京のアララギ発行所から郷里の妻不二子に宛てた書簡に、「はつせぐく／＼思ふ勿れ」とはつせの氣を引き立てようとしているのは、父親らしい心づかいを示すものであらう。五月は三女みをが猩紅熱に罹患した。その看護に尽して、「五月殆ど一ヶ月みをを子(二女十四才)に猩紅熱に病まれ余病も三つ計り出さうにて昼夜看護しまひには小生の目が腫れて裏山の木の葉が見えぬまになつた」(「大正一一・六・二四 斎藤茂吉宛書簡」とかいてゐる。みをの病氣はこの看護の甲斐があつて、「幸余病一つも物にならずして全治」したものの、「そのため六月号は選歌まで休んでしまつた」(同上続き)のである。

こうした困難な状況を無事切り抜け得たのは、発行所に土田耕平

と藤沢古実とが留守を守っており、連絡や『アララギ』の編輯の実務を引き受けてくれたためである。二人は赤彦の子飼いの弟子であり、指示は忠実に実行された。殊に耕平は『アララギ』の選者をつとめていたから、赤彦の大きな力となった。

新しい体制が固まってくるのと同時に、しかし一方では、『アララギ』の結社としてのまとまりを不安定にさせる要因も新たに生まれてきていた。それは、大正十一年に入ると有力な同人の幾人もが出詠しなくなったことにあらわれている。釈道空は前年まで選者をつとめていたが、この年は選者を退くと同時に出詠もやめた。同人の古泉千樞や土屋文明は選歌の仕事は続けていたけれども、やはり出詠をしていない。

欠詠の理由はそれぞれ別であるにしても、このことは、赤彦を中心に運営される『アララギ』の新しい体制に対して、古い同人たちが何ほどか異和感をもっていたことをある程度反映しているであろう。

しかしながら赤彦がそのことに気づいていた様子はみられない。赤彦はそれで、たとえば、茂吉に宛てた書簡でも、「六月号に小生らの仲間一人も歌なし、非常に残念なり」(大正一一・六・二三)と記しているだけである。そして筆を続けて、「今の処小生一番勉強してゐるやう也」(同上続き)とかいている。また、「長塚全集は小生纏める事にせり」と意欲を燃し、「アララギ会計近來よし紙代減り売上げ多く且土田万事引しめてくるゝため也今千七百部也秋より二千でもいゝかも知れぬ今は残本は殆どなき姿也(以前に比して)」と『アララギ』の経理状態が良好に推移していることを報知している。赤彦は全力を注いで目前の仕事に取り組んでおり、他をかえりみる余裕をもたなかったのである。

赤彦はこのような状態のなかで一段と自信を強めるにいたり、会員で自分の指導に服さない者に対しては、排除する方針をとった。

たとえば、由利貞三である。由利は道空門の若手の歌人であるが、赤彦の方針に不満をいだき、その意見を『アララギ』以外の場所に発表した。これについて赤彦は由利を退会させるべく、発行所の土田耕平と藤沢古実に宛てて、諏訪から「由利氏会費残額アラバ(六月以後)返送シ給へ」(大正一一・六・二六)と指示を与えている。会費の返送によって退会を迫るのは、石原純と原阿佐緒の恋愛事件に関連して三ヶ島霞子が『婦人公論』に阿佐緒弁護の意見を發表したときにも霞子を退会させるためにとった赤彦常套の意思表示の方法であった。むろん由利を退会させたについては、「由利氏に對シテ取りシ順序大体古泉岡平福三氏ニ御話シ下サイコレハ矢張必要也」(同上続き)と記しており、主要同人の了解を得ておくよう指示しているけれども、これはもとより処分したあとの報告であった。

『アララギ』の新体制は、このようにしてその基盤をいよいよ固めていったのである。

### 三

森鷗外が没したのは七月九日であった。この日諏訪から上京した赤彦は、鷗外の重態を聞いて急ぎ千駄木町の鷗外邸を見舞った。しかし鷗外は同日の午前七時、すでに息を引きとっていた。赤彦は翌十日、ドイツの茂吉に宛てて「昨日上京して鷗外先生重態を聞き御宅へ参上すれば已に逝去せらる明治の偉才斯の如くして次ぎへに逝く」とその死を報知した。

写生派と鷗外との関係は、早く明治二十年代に青年期の正岡子規

が鴈外の千桑山房に出入りしたときにはじまり、明治四十年三月から四十三年三月まで鴈外の主宰のもとにひらかれた観潮樓歌会の時期を経てこんにちまで浅くないものがあつた。左千夫が大正二年七月に死去し、『アララギ』の十一月号を「伊藤左千夫追悼号」として発行したときも、鴈外の手になる「伊藤左千夫年譜稿」を掲載（大正八年七月号に再掲）しているし、近年においても、九年の十月号から十年十一月号まで鴈外の「霞亭生涯の末一年」の稿を乞い得て『アララギ』に連載していたのである。

赤彦は観潮樓歌会の頃は出京前であり、この歌会に出席したことはなかつたけれども、上京して『アララギ』の編輯を担当してからは鴈外について知ること多くなり、特にその歴史小説を愛読して、尊敬の念を厚くしていたのであつた。

『アララギ』八月号の「編輯所便」では、赤彦は鴈外の死を悼み、次のように記している。

森鴈外先生、七月九日長逝せらる。痛恨の至也。先生晩年の抱蔵はその一二端緒を世に発表せられしに過ぎず。完結には少くも数年を要せられしなるべし。此の点のみにても残念に堪へず。世の先生を言ふもの、多く先生の多方面に互りし事蹟を説く。小生狭小にして多く先生の創作（主として小説）を知るのみ。先生の小説は明治大正にあつて、群星を抜くこと甚だ遠し。その余りに遠きがゆゑに流行渦中に入らざりし観あり。その光鑑は後に至つて愈々明白なるべし。

アララギ同人中、鴈外先生邸歌会に参りたるは故左千夫先生と茂吉、千樫也。千樫に乞うて本誌に回想記を掲ぐべし。小生も先生に面接せし際の座談記を草すべし。先生的一端をも漏さざらんと冀ふゆゑなり。

鴈外の葬儀は同月の十二日、谷中斎場において執り行われた。赤彦は古泉千樫と共に『アララギ』を代表して葬儀に参列し、改めて深く哀悼の気持をあらわした。

赤彦は鴈外の葬儀の四日後、七月十六日にかねて準備をすすめてきた富士見高原の伊藤左千夫歌碑の除幕式に出席した。碑に刻まれた左千夫の歌は、

寂志左乃極尔堪旦天地丹寄寸留命乎都久都九止思布

の一首で、碑面の文字は赤彦の揮毫によるものであつた。

参集した人びとを前に、赤彦は、岡麓、平福百穂、古泉千樫、土屋文明と共に左千夫についての追憶談を語つた。

七月三十日は左千夫の忌日である。左千夫の墓所である亀井戸普門院に会員を招集し、墓前に香を供えたあと歌会を催した。

大正十一年の夏は異常な猛暑が続いた。八月中に記された『アララギ』九月号の「編輯所便」に、赤彦は「炎暑堪へがたし。東京にて堪へがたく、信濃に來りて猶且つ堪へ難し。東京にて数十年來の旱天なりと言ふ。信濃にても数十年來の炎天なりと言ふ。」と記している。この猛暑のなかで八月十五日富士見高原で激しい夕立に遭つて以来、体調をくずし、下旬まで殆ど筆をとることかなわぬ状態度過した。

この年の九月十七日は子規が歿してから満二十年の忌日に當つてゐた。当日はアララギ会員と共に子規の墓所である田端の大蔵寺において子規忌を催した。ちょうど日曜日であり、参加者が多く盛会であつた。

七月に鴈外の葬儀に列席したのに続いて、赤彦は、『アララギ』



の先達である伊藤左千夫、正岡子規の供養をし歌会を催したのを通して、これら先人の生涯とこの人びとが後代にのこした仕事の大きさを思い、改めて歌道に精進する決意を新たにしたのであった。

さすがの猛暑も九月も半ばにはおさまって、二十二日の朝は気温が急激にさがり、山には降雪をみた。例年になく早い降雪であった。

万葉集叢書の出版の計画もこの頃には進捗をみせていた。そして叢書の第一輯として赤彦の校訂による富士谷御杖の『万葉集燈』が九月上旬には発売となるよう準備がほぼ整った。赤彦は『アララギ』の八月号に同書の広告を掲載し、「編輯所便」でも、「万葉集叢書発行の挙、古今書院によりて企てらる。これ万葉集研究者に対する天来の幸福音なり。斯くの如き挙の従来未だこれ無かりしこと出版界の遺漏事なり。」と喜びを述べた。また、八月十日付でアララギ会員に宛てて予約購読の勧誘状を送り、「万葉集叢書刊行のことは先年万葉集楡姫手出版に引続きアララギ発行所にて企画せし所なれど力足らずして今日に及び候次第にて今回古今書院にて右刊行を決意せしは殆ど利害の打算を度外に置きし所に有之アララギ会員の特に御声援あらんことを希望仕候古今書院主人の持む所も主としてこゝにあるべくと存じ候其模様にては刊行部数の加減を要すべくと存じ候就ては貴下御購読の有無御手数乍ら一応お知らせ下され候はば有難く存じ候云々」と記している。

『アララギ』の九月号ではさらに自分の執筆した『万葉集燈』の解説文を掲載して、「万葉集燈」成るに近し。会員諸君の購読意外に多数に上り喜悅に堪へず。五百部刊行或は忽ちにして尽くべし。該書の本質は本号拙文により、一斑を窺ふに足らんか。一読を冀ふ。」と購読を強くすすめている。

『万葉集燈』の刊行は予定よりいくらか延びたものの、九月下旬

には発行になった。

万葉集叢書の刊行に深く関与したことについては、赤彦は飽くまでも自他の作歌に益するためのこととしていた。しかし赤彦のこした仕事は、その内容と、校訂・解説を佐佐木信綱・武田祐吉等の国文学者と分担していることからして、すでに学者の領域にまで踏み入ったものといえるであろう。この年以後の赤彦は、この叢書の仕事に相当の情熱を注ぐことになったのである。

十月中旬京都に赴いたのは、京都帝国大学に所蔵されている万葉集の古写本を調査するためであった。万葉集叢書にかかわる仕事であったことは言うまでもない。これ以前に万葉集の写本の一である仙覚本の一本が京都大学に所蔵されているのを知り、万葉集について教えを乞うことの多かった武田祐吉に確かめ、岩波茂雄を介して京都大学の西田幾多郎に閲覧、書写について斡旋を依頼、了解を得ていたのである。

京都では黒谷の瑞泉院を宿とし、十九日から以後、毎朝吉田山を越えて京都大学に通った。当時京都大学で国文学を講じていた沢潟久孝の記すところによると、この折赤彦が閲覧した写本は、古く京都の一乗寺の曼珠院に伝えられた、校本万葉集という京都大学本であり、赤彦は博文館発行の『万葉集略解』に書入れをしていたという。

巻一の書入れがすんだ二十二日に、大阪毎日新聞社記者で西宮に住んでいた中村憲吉が来訪したので、二人は金閨寺、嵐山の方面を散策した。

このときに赤彦の仕事に一応区切りがつくのを待って奈良・飛鳥地方をめぐる約束をしたので、月末になって憲吉が再び訪れた。

赤彦は長野師範学校の生徒のときに修学旅行で関西に旅をし、奈

良・飛鳥地方をめぐっているの、この度は二度めであったが、万葉集の研究に力を注いでいるいまは、この地方の風物から、師範生の頃よりもはるかに深い印象を与えられた。

憲吉の家に二泊し、さまざまなことを話し、憲吉には歌集出版のこともすすめた。十一月一日は、師範時代の二年後輩で、奈良女子高等師範学校につとめていた春日政治の案内で法隆寺の夢殿の観音像を拝した。

赤彦が旅行から帰郷したのは、十一月二日の夜である。翌三日に平福百穂に宛てて大和めぐりの感想を、「中村君と三日大和巡りしたのは欽幸の至りに存候万葉遺址も幾分心地して喜しく存候法隆寺夢殿は奈良高等師範教授同道してくれ詳細に見せて下され忝く存じ居候三月堂も丁度拝見出来申候一体に奈良地方の自然は京都よりも伸びくした広さあり地相も素朴にて感じよく候只人間は甚しく淫靡の様に存じ候」と報じている。

帰郷した後風邪に罹り発熱臥床したが、旅の疲れも出たのか、長引いて、十二日頃は平熱に復したものの、咳が出て、月の半ば過ぎにはまだ床のなかにいた。

その赤彦のもとにアララギ発行所の土田耕平、藤沢古実の二人から手紙が届き、土田、藤沢に高田浪吉を加えた三人で催して『アララギ』十一月号に掲載した合評「赤彦の歌を評す」について胡桃沢勘内から発行所に問責の一文が寄せられたことが記されてあった。

赤彦はこれに返事を出して、「胡桃沢君からどんなことを言つてやつたか知らぬがさういふ原稿は成るべく出して置き給へ言ふべきことは君が更に書く方がいゝ小生は今迄この方針でやつて来た妙な反対説でも悪意のない限り出して愚見を書き添へて来た反対説を抹殺するは器局狭いことなり由利の如きものでも出来るだけ小生は出

してゐた尤もあの程度では考へものなり談話らんは斯ういふことのために設けたるなりこれは胡桃沢君の事のみにて言ふにあらずべてに互りて言つておく方よいと思ふなり」(大正一一・一一・二二)と指示した。

さてしかし、赤彦は、勘内の原稿が続いて転送されてきたのをみ、勘内がアララギの先輩という立場に自分を置いて、作品の批評に当つても「師弟の情誼」を顧慮せねばならぬことを訓戒の調子で説いているのを知ると急に態度を変えて、次の指示を耕平と古実に与えた。「胡桃沢君ノ原稿ヲ見タ驚クニ足ラヌアノ辺ノ思想ガ可ナリ多イノデアルサウイフ思想ニ対シテ物言フニ絶好ノ機会デアル土田君一ツビシリト意見ヲ書キタマヘアレヲ出サヌト困ツタカラ出サヌ」ト大抵ソナナ風ニ思フニ極ツテキル云々」(大正一一・一一・二三)さらに翌十四日に古実に宛てて、「胡桃沢君の文章あれは絶好の原稿なりああいふ思想に対して今迄態々でも一言云つておきたかつたのだからあれに対して君等が自分の態度アララギの態度を声明しておくことは非常にいゝ機会が来たのであるあゝいふ原稿を見ず／＼見逃すとは何といふのろまさであらう小生も土田の次へ出すやう昨夜から一文書いた胡桃沢の事は要点のみ書いたとして君等の批評に対する愚見を成るべく詳しく書いた雑誌として実にいゝ材料である近來の愉快事である人から何か言はれることをイヤがつてはいけないズン／＼反駁すればいゝのであるこの事土田へも連名で書いたが序が出来たから又重ねて書く小生に向つて書いた原稿なら小生一人でうんと書くこれは土田が書くべきなり」とかき送り、平福百穂に宛てても、「今度は胡桃沢君より十一月号歌評につき猛烈(?)な師弟論のやうなものを土田藤沢に寄せて来て小生に転送して来ました小生考ふるには是は絶好の機会と存じます今迄合評のたびに煩

をふくらませて歌を寄せなくなつた大人がいく分多いその度にアララギに批評神聖論を書きたい位に思つて居りしも態とらしくて控へて居りました胡桃沢の原稿はこのまゝ出して土田のそれに対する意見をびしりと書いておいた方がいゝと思ひます」と勘内の原稿について報知すると共に、対処の仕方についての自分の意見を記している。

赤彦が勘内の意見にはげしい反応を示したのは、むろん作品の批評に当つては師弟のまがきを越えるきびしさがあるべきだと信じていたからである。それで赤彦は、『アララギ』十二月号において、自分の意見を「文芸批評は絶対なものであつて、師弟、親子、君臣の關係をも超絶して在在せしむべきものである」と表明し、批評の神聖を強く主張している。しかし赤彦が勘内のように『馬酔木』時代からの仲間であつた歌人に対してこれほどまで強い態度に出ることは従来なかつたことでありやや異常の感をさえたかせるほどであるのは、勘内の背後に、釈道空など、自分のゆき方に対して批判的な態度をあらわにしはじめたこれまでの仲間の歌人たちのかげを認めたからであつたのではなからうか。「胡桃沢君の意見の中には某氏の手紙といふを多く引いてゐるので非常に面白いこれは勿論アララギに歌を出さぬ大人の側から出て居りますアララギには学問がなから自分自身を肥すことが出来ぬといふやうな種類の手紙ですどうも面白い」(大正一一・一一・一四 平福百穂宛書簡)と言っている。赤彦はこの際、これら考えを異にし、自分に批判的な態度をとっている人びとはもとより、一般の会員に対しても、自分の信念を明らかにしておくことが今後のために必要であると判断し、特に強い態度をとつたのであらう。

この頃になると、土田耕平・藤沢古実などのほかに、高田浪吉・

竹尾忠吉その他赤彦直系の若い歌人の成長がいちじるしかった。殊に耕平はこの三月、歌集『青杉』を上梓し、その清冽な歌風によつて『アララギ』のなかで存在を重くしていた。これらのことも赤彦に自信を与えていたのである。

この頃赤彦が土田耕平の歌をしきりに称揚し「その澄み切つた境地には、殆ど前人未到と思はれる所がある。」(歌集『青杉』を評す、大正一一・一一)と言ひ、「日本短歌史上に独特の地位を占むるに足る。」(同上)とまで高く評価していることも思ひ合わされるのである。

龍城主義を基本的態度としてきた赤彦も、このあたりから自分と対立するものに対して積極的に対決していこうとする姿勢に転じたのである。

長老の岡麓や『アララギ』が経済上援助を受けることも多かつた平福百穂は出詠を続け、赤彦に協力的な態度を見せていたこと、三月号以後出詠していなかつたとはいへ、主要同人の一人である中村憲吉の支持が明らかであつたことは赤彦に安心感を与えていた。特に無条件に相許すところのあつた憲吉とは先頃意見を交換してきただかりであつた。『アララギ』の創刊者であつた巖真は、すでに『アララギ』から遠ざかつていたが、この十月には歿している。赤彦が自分に対立する異分子を切り捨て、自分と行を同じくしようとする人びとと共に、そして就中直門の弟子に囲まれて、歌道に精進したいと願つたとしても、そう不自然とはいへぬ状況も生まれてきていたのである。

ほかに赤彦にとつて目障りなのは古泉千樞の存在であつた。千樞は性格がルーズで、問題の行爲も多く、赤彦は、できれば『アララギ』から追放したいくらいに思つていたのであらう。しかし『馬酔

木』の頃からの仲間であり、『アララギ』の主要同人として現に選者もつとめてゐる千慳を排除することは、この時点では不可能なことであった。

#### 四

『アララギ』の新体制が固まってくるのと平行するように、大正十一年の後半に入ると、赤彦の歌には、いっそう進境が認められる。

わが歩み近づきぬらし松原の木の間ひびく山川の音

(有明温泉)

(有明温泉行)

たえまなく鳥なきかはす松原に足をとどめて心静けき  
いづべにか木立はつきむつきぎに吹きよする風の音ぞきこゆる  
松原<sup>しんげん</sup>ひろがりあへる若き葉に降りそむる雨は音立つるなり

これら『アララギ』七、八月号に掲載された歌をみても、聴覚の働きを主として一首が統一され、やや流動感に欠ける欠点は認められるものの、すっきりと仕上げられている。表現の単純化ということも、従前の作に比べると、より行き届いているといつてよい。

九月号以後になると一段と秀作が多い。そしてその歌に心境の表白といった趣きが観取されるようになったことも注目される。

(柿蔭山房)

暑き日のま昼まにしてもの書かむ心のそこのしまし澄みつる

いく久につづく早りに蟬さへも生れざるらむ声の乏しさ

(夜座)

つきつきに過ぎにし人を思ふだにはるけくなりて我生けるらし

(山房行事)

朝ごとに庭の胡桃<sup>くるみ</sup>樹の下土におのづから落ちてある果を拾ふ

(日ごと物書きつづくるほどに)

座りつつただにありと思ふだに久しくなりぬ夏ゆくらむか  
野分すぎてとみにすずしくなれりとぞ思ふ夜半<sup>よなか</sup>に起きゐたりける

(八月二十四日野分)

はやて風枝ながら揺る柿の実のつぶらつぶらにいまだ青けれ

(またの日)

冬菜まくとかき平<sup>な</sup>らしたる土明かしの幽けきは昼ふけしなり

(庭前の畑)

鳥なかに手もてわが扱く紫蘇の実のにはひすがしきころとなりし

(九月十九日快晴、子規忌)

むらぎもの心澄みゆけばこのま昼鳴く虫の音も遠きに似たり

斎藤茂吉は、大正十一年の赤彦の進境について、「歌境が澄み冴えて来て、一種特有の声調を有するに至つた。その頃赤彦が唱へてゐた寂寥感といふやうなものが作歌の實際に於て成就せられ、すでに短歌の堂奥に参じようとする力量を示して居た。」と『アララギ二十五年史』で評しているけれども、これはこの年後半の作品に適合する批評といえるであらう。

もつとも赤彦の歌風の変化については、直門の弟子にもすぐには

受入れられなかったらしく、たとえば、さきの「赤彦の歌を評す」の合評においても、耕平は、「野分すぎて——」の作について、「どうも全体にこなれてゐないやうだ」と評しているし、古実も、「歌はいつもよりややおとるやうに思ふ。」と批評している。ただこれらの弟子たちも赤彦の歌境の変化のきざしには気づいていたのであり、古実は、「兎に角今月はないかの変化が見受けられるが、どうなるかは、今後の問題である。」と述べている。十一月号に赤彦の歌の合評が掲載されたのも、赤彦自身、自分の歌境の変化について自覚するところがあり、作品の合評を指示したのではなかったであろうか。

赤彦の歌境の変化について側近の弟子たちさえ理解が十分でなかったとはいへ、赤彦の強力な指導の下にある若手の歌人たちがその歌の影響を強く受けたのは当然である。この年の若手の歌は大体赤彦調というべきものになり、取材、語氣にまで赤彦調がひびがっていることは、茂吉も指摘しているところである（『アララギ二十五年史』）。大正十一年の『アララギ』は、こうして茂吉が評しているように、「一言にしていへば本巻は、赤彦によって統一せられたアララギといふことになる。」（『アララギ二十五年史』）と総括してもよいものになったのであった。

年の終りが近づくと赤彦は、例年のようにこの一年を振り返った。そして、不安定な一時期がありはしたものの、おおかたは順調に過ぎ得た一年であったことを思った。殊に赤彦に満足感を与えたのは、『アララギ』が自分を中心に新体制を形成し、安定した状態に入ってきたことの認識と、作歌における進境の自覚であったろう。来年の秋には歌集を出し、第二章謡集も出そうと赤彦はさらに意欲を燃え立たせた。そうなれば、不如意を統けてきた家計も安定する

であろう。

赤彦は、万葉集研究も来年になれば、多少目鼻がつくであろうことを思つてこれまで研究のために経済上の援助を受けてきた平福穂になおしばらくの間、援助を継続するよう依頼することにした。「小生万葉集研究も先年より並々ならぬ御庇護により多少の進捗を得候事心肝に透りて感謝罷在候只小生生来の疎懶にて雑用を交しへ幾分の成績をも挙げ得ず残念の至奉存候今年末迄に巻一二位をまとめ御高覧に供するつもりにて此程までもそのつもりに致し居り候処如何にしても今三四ヶ月を要し事によれば来年半ばに至るかと思はれ申候就ては毎年の御厚志も際限なき事に有之此際御辞退申上べき儀と存じ候処右様の次第に有之甚以て厚顔を絶し候感有之候へ共此処三四ヶ月の御援助を賜り候はゞ小生安堵の心にて事に従ひ得べきかと存じ図図しき御願に有之且つ御厚志に甘ゆるに類するかと存じ幾度も思案いたし候へ共思ひきりて願意貴見に達し候次第に有之候」（大正一一・一二四）

赤彦は如上のようにして『アララギ』十二月号の「編輯所便」において次のように記したのであった。「年暮れんとす。今年『アララギ』に稿を賜はり、厚意を賜はりし諸氏に、謹んで謝意を表す。」「小生等今年よく勉強したりと思はざれど、弛緩せりとも思はず。前途に到るべき大なるものの残れるを感じつつ、この年を終へんとするのみ。年若くして、早く倦むものあり。一心に精進して他を顧みざるものあり。要は、畢生の到る所如何にあるべし。」「斎藤君益々健康にて在外第二年を送るを喜ぶ。その他アララギ同人の身辺今年如く事無かりしは罕なり。喜ぶべきなり。」大正十二年の赤彦の軌跡がいかなるものになるか、それについては、稿を改めて考察したい。